

熱川温泉病院

木田 久美子 (外来看護師)

功 績 的確な判断で医療連携室に指示しながら通院歴のある医療機関から必要な情報を収集し、転院先の医療機関へ速やかに伝えたことで適切な救命措置へ繋げ、一次救急を担う当院への信頼に応えた功績。

推 薦 者 鈴木 直美

推 薦 理 由 本件は救急医療において医師・看護師・医療連携室がチームワークを発揮し、患者さんを速やかに適切な高次医療機関に転院搬送させた事例であるが、特に外来看護師として日頃から救急患者に接している木田の、機転を利かせた指示や咄嗟の判断で必要な情報収集が行われたことが大きな要因であるため。

内 容

【Y・Tさん 70代 女性】

東京都在住、肺がんで東京のC病院に通院中(外来化学療法を受けている)。6月上旬より家族で伊豆を旅行中、足湯で転倒。食欲不振、体動困難を主訴に翌日当院を受診。

当日は一次救急当番日で、当直医師と一緒に待機していたのは外来看護師の木田であった。彼女は、急変していく患者の容態やご家族からの聞き取りで単純な打撲傷・体調不良ではないと感じていた。

そこで、通院治療中のC病院の主治医の指示が必要になると判断するや、素早く当院医療連携室を通じて連絡。主治医が不在であったため、緊急的状況を説明しコンタクトを取りたい旨を伝えた。

診察の結果、外傷は左下腿の皮下出血のみ。頭部CTに頭蓋内出血は認められなかった。

また、採血では炎症上昇と低ナトリウム血症が認められ、胸部レントゲンでは断定はできないが何らかの感染を契機に心不全を発症したものと考えられた。頻呼吸RR20以上、起坐呼吸あり、酸素及びフロセミド投与。

診察の間も、容態が刻々と悪化。呼吸・循環の専門的管理ができる救急病院への転院が必要であった。

転院先はまず通院中のC病院が考えられたが、救急隊と相談のうえ搬送に時間がかかり過ぎるため断念。

近隣の救急病院をあたりながらも、間もなく主治医と連絡がとれ情報と指示を受けることができた。木田はすぐさま、医療連携室を通して転院先に決定したI病院に伝達。間もなく転院搬送された。

後日、患者さん・ご家族より「入院加療後、自宅に帰ることができました。安心しました。ありがとうございました。」とのお礼状を頂いた。